

言葉によるふれあい

渡辺和子

四月、新任校で私を待っていたのは二十六名の一年二組の児童だった。

着任式、続いて入学式も無事にすみ来賓のかたの退場となると、会場がざわめき始めた。それはなんと、「バイバイ」と言って、来賓のかたに手を振つている新入生。来賓のかたも緊張したふんい気が笑顔に変わつての退場であった。

私は、あつ現代つ子だと感じるともに、そこに、言葉による触れ合いの姿を見た。

こうして、私と子供との出会いがあり、日数を重ねるに従つて、多くの障害が感じられたが、どうしようと突きつめてみても、本校での生活の浅い私には、解決の原因すら探られなかつた。でも、話し合うこと、言葉を交わすことによつて、暖かい人間関係を育てようという私の考えは変わらなかつた。

児童觀察を通して知つた自己表現の障害となつてゐる話し言葉、思いやりの心を育てる会話などから実例を選び折あるごとにその意味と使う場を教えた。「はい」という言葉は、自分の名前を呼ばれたときに、また、自分が納得したり、了承したりしたときの言葉

「先生、私、スプーンないの」

と言い出した子供がいた。まだ学校に慣れない子にとっては、どうすればよいのか分からぬ。すると、K子が食事をやめて、

「私、持つてきてあげる」と言って出て行つた。スプーンを持つて渡したが、何の言葉も返つてこなかつた。私は、さりげなく、

「K子さんは、食事をやめて、あなたのために行つてきてくれたのよ。なんといえどいいの」

「どうもありがと」

といふ言葉を発した。K子も、その言葉によつて自分のとつた行為を意識し直しかつたと思つ。

また、意義のある行事だと思ったことは、全校生による秋の芋煮会である。子供会単位による活動で、上級生と下級生との触れ合い。そして子供と担当教師との触れ合い。私もその一員として初参加した。

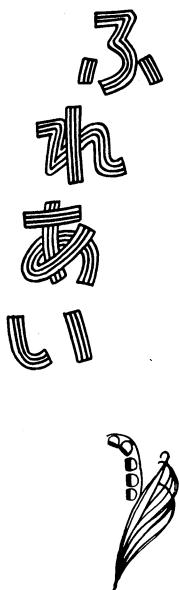
子供との触れ合いを大切にする本校教育活動の精神を知り、生活に支柱を得た感じがした。

これからも、本校の実態に対する理解を深めつつ一層励みたいと思つている。

○秋日暮れ 山路を帰る 子をせかす
○芋煮会 薪をもとめ 走る子ら
○芋煮会 いただきますの満ちた声

(安達郡大玉村立玉井小学校教諭)

教育隨想



本校に勤務し、先生がたの教育活動の中に暖かい児童との触れ合いの姿を見ることが多い。広域学区のため、山路を帰る子への心づかい。土曜日の子供会単位によるいっせい下校時の安全指導、班長の後について小さい体で五キロ、七キロと帰る児童に、「負けないで歩くのよ」と見送る励ましの言葉。

それ以来、その子には、まだ多少の問題行為はあつたが、「はい」という返事は、うれしかつた。